

感謝感謝

山並蒼依（宮崎・都城市立西中学校）

七月二十四日は、十年前百才の天寿を全うした曾祖母の命日。明治生まれの曾祖母はとても強い女性だったそうだ。夫を早くに亡くし、女手一つで子ども三人を大学まで出した。

熱中症で入院した九十二才までは、一人暮らしをしており、その後、施設に入所した。百才の誕生日から、自宅介護に移行し、祖母と暮らすようになった。

母の里帰り出産のため、曾祖母が亡くなるまでの約三ヵ月間を一緒に暮らした。

「ブゥーウさんがね。」

と、曾祖母の「くまのプーさん」の読み聞かせに、二才の私が笑い転げた記憶がある。

家の周りを散歩するときは、私が手を取って先導した。曾孫と一緒に歩ける喜びだろうか、微笑んでいる写真がある。

弟の誕生を知ると、酸素ボンベを引きながら産婦人科まで行った。亡くなる四十日前のことだ。曾祖母は涙を流し喜んだ。

私の七五三用の着物の腰上げをするぐらい元気だったのが、次第に食べる量が減り、ベッドに横になっていることが増えた。

「蒼依がない。」

探し回る母たちの心配をよそに、私は曾祖母のベッドで並んで寝ていたそうだ。その姿が幸せそうで、とても嬉しかったと祖母は言う。

命が尽きようとしているとき、

「ばあばあちゃん、起きて。」

と、私は何度も何度も大声で呼びかけた。枕元には「苦しまないできれいに死んだらいいが。長いこと大変だったね。有難う。感謝感謝」と書かれた紙片が残されていた。

曾祖母が大往生できたのは、生きる気力を失わなかったからだが、加えて社会保障制度に守られていたことも、大きな要因である。

施設に入所できたのは、介護保険サービスがあったから。健康保険では、急な病気でもすぐに診察を受けられ、必要とあらば入院できた。さらに申請すれば高額医療費制度も受けられ、費用負担が抑えられた。

調べてみると、社会保障の財源は消費税であることが分かった。税収が景気の変化に左右されにくく安定しているからだ。

今回の参議院議員選挙では、「増税反対」という言葉をよく耳にした。私も、服や文房具などを買う際に、表示されている価格より支払額が増えてしまう消費税には、損した感じを受ける。更なる増税は反対だった。でも、曾祖母に思いをはせたとき、税金により救われる人がいることに気づいた。社会は助け合う構図になっているのではと考えるようになった。また、自分自身も医療費の分野では助けられていると感じる。

税金を払うことは国民の義務。「義務」というと高圧的な感じがするが、何の財源になっているかを勉強することで、優しい感情も起こる。仕組みをしっかり学び、感謝して生活していきたい。